

第4節：発掘調査の概要

1. 調査の経緯

上人壇廃寺跡は、古くから農耕中に瓦や土器が出土することで知られていました。過去の記録では、明治23（1890）年、周辺地の開墾を行った際、耕地中に5間四方程の土壇があり、これを上人壇と称し、ここより一段低地に字上人塚があったとされています。

大正時代から昭和初期にかけて、当時白河中学校の教諭であった岩越二郎氏などが白河市の借宿廃寺跡や泉崎村の関和久遺跡などの瓦の調査研究とともに、上人壇廃寺跡から出土した瓦の収集や研究を行っています。また、内藤政恒氏は昭和8・9（1933・34）年に「上代ニ於ケル東北地方ノ仏教文化」研究の一環として上人壇廃寺跡出土古瓦を調査し、奈良時代と平安時代の軒丸瓦としています（『東北地方出土古瓦展覧目録』東北帝国大学法文学部、1935年、「東北地方出土の特異文様古瓦について」『夢殿論誌』19号、1939年）。さらに、昭和13（1938）年、角田文衛氏は上人壇廃寺跡を石背国に置かれた「国府寺」の跡と考えました（『国分寺の研究』1938年、考古学研究会）。これら一連の研究で、上人壇廃寺跡は出土瓦とともに奈良・平安時代の寺院跡として広く知られるようになっていきました。

昭和28（1953）年、須賀川市出身の首藤保之助氏は当地で瓦と瓦塔片を採取しました。また、地元の有我一二氏や鈴木安信氏など遺跡に関心を寄せる多くの個人によっても瓦や瓦塔が採取されました。

昭和36（1961）年、近接する東北本線の複線化工事にともなう発掘調査を須賀川市教育委員会が実施することとなりました。この調査は福島県教育委員会の梅宮茂氏を担当者として、東北大学の伊東信雄氏・工藤雅樹氏、玉川大学の内藤正恒氏が調査の指導、地元からはのちに須賀川市の文化財保護の中核をなす有我一二氏・江藤吉雄氏・永山倉造氏などが調査員として参加しており、須賀川市における最初の組織的な発掘調査となりました。

2. 調査の概要

上人壇廃寺跡の発掘調査は、最初の調査となる昭和36・37（1961・1962）年の東北本線複線化工事にともなう緊急調査に始まり、ついで昭和50年代の環境整備を目的とした遺跡の内容確認調査、そして平成年代の主要遺構の再度の確認調査の、大きく分けて3回にわたる調査が行われています。

また、これらに加えて平成8（1996）年度に、不明となっている過去の調査での基準点の復元測量業務を実施し、翌9・10（1997・98）年度には、復元された基準点を使用して現況地形図（等高線図）作成と、復元基準軸線と実際の遺構との位置関係を明らかにするため、小規模な検証作業を実施しています。

平成19（2007）年～21（2009）年にかけて、主要伽藍や区画溝などの正確な位置や変遷を確認するための再調査を実施し、新たな建物跡や伽藍の変遷などが判明しました。

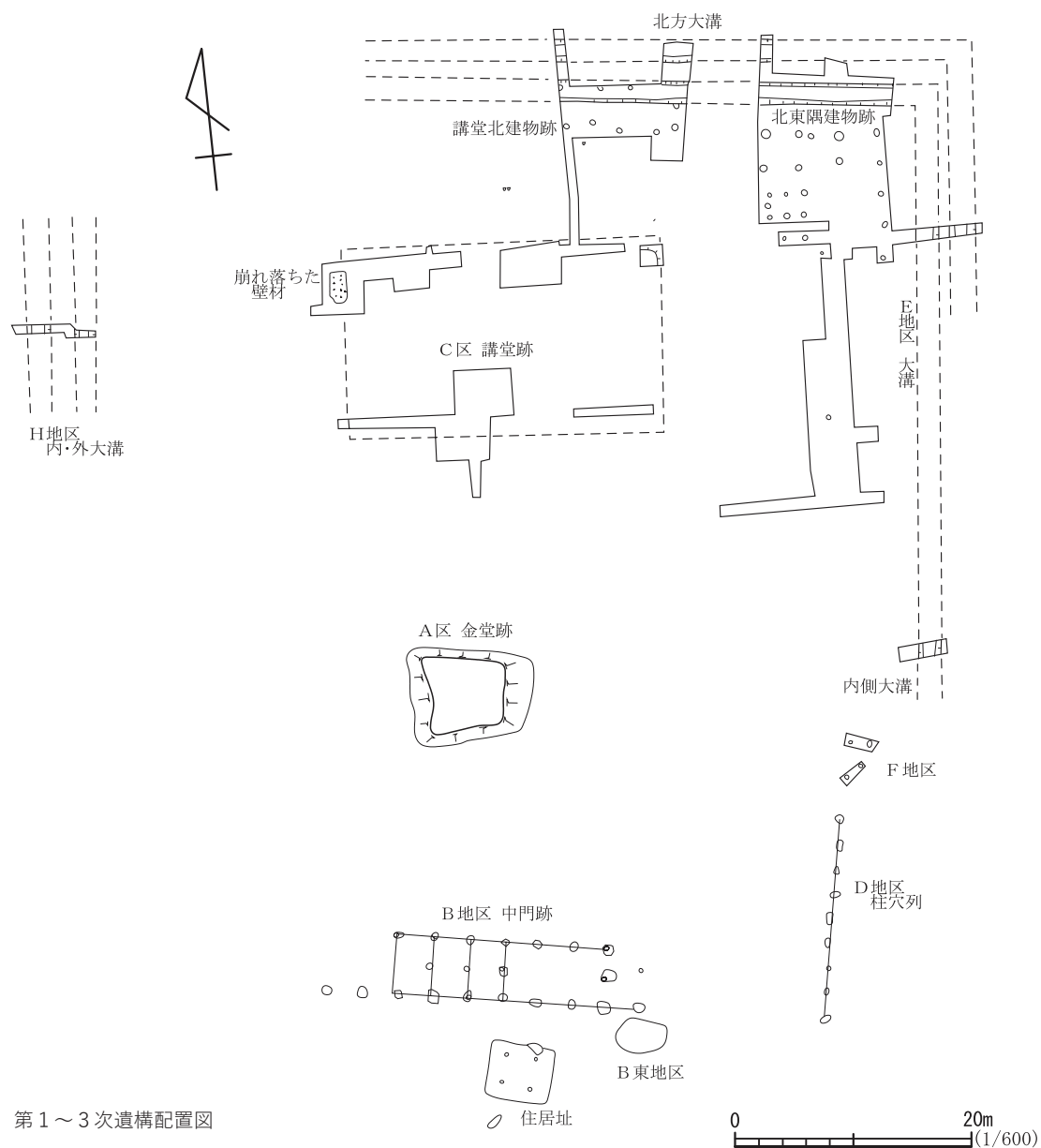
(1) 第1次～3次調査 昭和36(1961)・37(1962)年度

昭和36(1961)年の第1次調査は、当時の国鉄東北本線複線化工事にともなって削平される遺跡の南端部の記録保存を目的とした緊急発掘調査で、合わせて寺域の範囲確認を兼ねた調査となりました(第30図)。

この調査で、現存していた土壇は寺院の基壇と確認されました。基壇の北側からは積石を発見し、基壇規模が東西10.5 m、南北8 m、高さ90 cmとしています。基壇南方では8世紀初頭の住居跡(工事によって消滅)を確認しました。

同年の第2次調査は、先に調査した基壇跡を金堂跡と位置づけ、寺域の区画施設および範囲の確認に重点を置いて実施しました。また、基壇南方では八脚門となる中門跡の柱穴列を確認しました。この時点では桁行9 m、梁間4.8 mの三間一戸の門と推定しています。また、鉄道路線となる東南端で濠跡らしきものが、中門跡の東側で塀か柵列とする柱穴列、遺跡西南隅より窯跡がそれぞれ発見されています。

昭和37(1962)年の第3次調査は、柵列跡の調査、また、路線法面で検出された濠跡の確認、さらに中央部基壇跡北側での遺構の存在等の確認が主な調査の目的としています。第2次調査で確認した柵列跡につながる柱穴が3箇所、堀跡が東側、北側でそれぞれ確認されています。さらに、基壇跡の北側でも講堂跡の遺構が検出され、柱穴と思われる根固め石を確認しました。この講堂跡の基壇を断ち割った結果、版築されていたことが判明しています。講堂跡規模を東西約25 m、南北16 m、版築層は約80～90 cmの厚さを持つものでした。また、講堂跡の西北隅で焼けた壁土が発見され火災にあったことも確認されています(第30図)。



昭和36年1次調査風景



昭和37年3次壁土取り上げ状況



昭和36年2次 中門柱穴検出状況



昭和37年3次 北東建物跡

第30図 第1次～第3次調査（昭和36・37年）

(2) 昭和 51 (1976) ～ 55 (1980) 年度

昭和年代の調査は第 35 図に示した区域を 5 区分した調査区を設定して、5 か年計画で行われました。

昭和 51 (1976) 年度調査は中央部の伽藍を中心に調査を実施しました(第 34 図のⅡ区)。

中門跡は前回の調査と同様、八脚門と位置づけ、少なくとも 3 回の建替えがあったことが判明し、さらに、東西に取り付く柱穴列を翼廊として位置づけています。しかし、門跡東端で重複する 2 号住居跡との新旧関係は確認できませんでした。

中門跡の南側では窯跡(2・3 号窯跡)が発見されています。このうち、2 号窯跡は登窯で、焼成室からは 500 枚以上の瓦が焼成状態で出土しており、その灰原からも瓦塔の基壇片や多数の瓦片が出土しています。

金堂跡は、基壇周囲の南側から東側にかけて溝状遺構が巡ることが確認され、この範囲は東西 12.5 m、南北 10.5 m のほぼ方形を呈するものと推定しています。基壇はこの内部に築かれ、規模は東西 10 m、南北 8.5 m です。この基壇跡を塔跡あるいは堂跡と推定し、また、周辺からの瓦塔の出土を考慮して瓦塔の覆屋とも想定しているなど、複数の表記がなされていたため、この時点ではその性格が確定していませんでした。

講堂跡の調査では、新たに 2 時期の変遷が明らかとなり、旧期の規模は前回同様東西約 25 m、南北約 16 m とし、桁行 8 間、梁行 5 間の建物跡、新期はやや南東側に位置を移動・変遷した東西 30 m、南北 15 m の範囲とそれぞれ推定しています。金堂跡同様、複数の表記がなされ、基壇跡を塔跡と想定するならば金堂跡、金堂跡とすれば講堂跡としています(第 32 図)。



昭和 51 年度調査時基壇建物跡検出状況(北より)



昭和 51 年度調査(北より)



昭和 51 年度瓦窯跡 全景



昭和 51 年度調査時基壇建物跡検出状況(西より)

第 31 図 昭和 51 年～ 55 年度調査(1)

昭和 52（1977）年度の調査は、主に遺跡の北西端部の調査を行いました（第 34 図のⅠ区）。

この調査では、北側区画施設となる溝跡の確認と、これに並列する築地塀とその寄柱とも考えられる柱穴列が多数検出されました。また、3号窯跡周辺の灰原より瓦塔片が多数出土していることが確認されています。

昭和 53（1978）年度の調査は、主に遺跡の東側地区（第 34 図のⅢ区）を中心に、東側の区画施設となる築地塀遺構や北東コーナー部の区画溝内側で、築地塀に並行する柵列跡が検出されています。この、北側区画溝から金銅製経軸端や金鼓（当時は鉦鼓と報告）が出土しました。続いて、調査区南寄りの地区からは1間×2間の四脚門と推定している東門跡が検出されました。寺院の中軸線を折り返した地区を改めて調査したところ、ほぼ同規模の四脚門となる西門跡が発見されています。さらに北東側では総柱の柱穴群を検出し、複数の倉庫群と推定しています（第 32 図）。

昭和 54（1979）年度の調査は、遺跡の東端部及び北東部丘陵上の壇上遺構について調査を実施しました。東端部の調査では、東門跡から北に延びる築地遺構と寄柱と考えられる柱穴が確認されました。北側の丘陵上にあった壇状遺構は、これまで方墳と考えられていましたが、柱間9尺、4間四面の櫓状建物跡と判明しました。また、北東部倉庫群の調査も実施し、すくなくとも3回以上の建て替えがあったものと推定しています。

昭和 55（1980）年度の調査は、主に北東部の調査を実施しています。緩斜面上に窯状遺構（5号窯跡）、内郭中軸線の北部延長上と内郭に関係のある建物遺構群の存在を確認しています。このうち周囲に雨落溝をとまうと考えられる建物跡は、東西8間、南北5間で、6間×3間の身舎（柱の間隔は7尺）に9尺の廂が四面につく大型の建物跡と判明しました（第 33 図）。



昭和 52 年東部建物跡



昭和 53 年築地塀遺構

第 32 図 昭和 51 年～ 55 年度調査（2）



昭和 55 年四面廂建物跡

第 33 図 昭和 51 年～ 55 年度調査（3）



昭和 51 年現地説明会

(3) 平成 19 (2007) ～ 21 (2009) 年度

昭和 50 年代の調査成果を元に、市では上人壇廃寺跡の公園化整備を計画しましたが、遺構の内容や位置、変遷などで不明な点が多かったことから、平成 9 (1997) 年度に部分的な調査、平成 19 (2007) 年から 21 (2009) 年度にかけて、主要伽藍の再調査を実施しました。

平成 19 (2007) 年度の調査は、中心伽藍遺構区画施設の確認とし、東南端を除く想定される三方のコーナー部と東門、西門地区に調査区を設け、これまでの調査の検証を行いました(第 36 図)。

東門地区は過去の調査で東門とされる建物跡の精査を実施しましたが、明確な掘方が確認できませんでした。しかし、ほぼ同位置で新たに大型の掘方柱穴を検出し、これが東門になることが判明しました。また、これに接続する築地の痕跡を確認し、1 間×1 間の薬医門的な構造であったことが想定されました。また、西門地区でも過去の建物跡の精査を進め、四脚門構造となる建物跡は確認できなかったものの、新たな建物跡が確認されました。南西部では、区画溝を埋めた後に構築された瓦積による暗渠施設や北西部の区画溝も新たに確認しました。

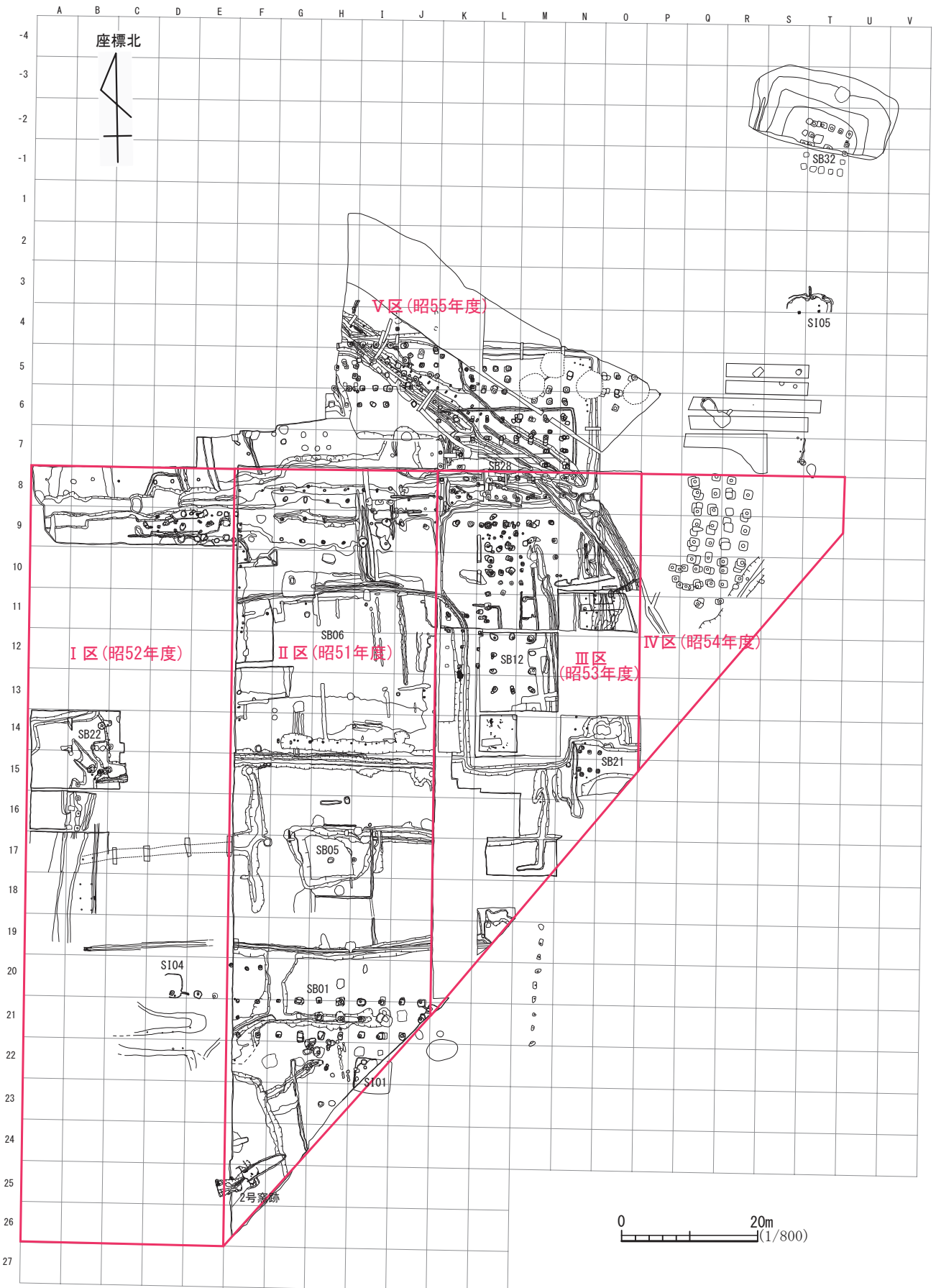
平成 20 (2008) 年度の調査は、中心伽藍となる主要遺構の規模・構造等を確認するための調査を実施しました。中門跡の精査では、昭和年代の掘り込みの痕跡や残存していた柱穴(掘方や柱痕)、堆積土などを再確認し、これによって新旧少なくとも 2 時期の変遷が認められ、各々の精密な柱間寸法が判明しました。また、これまで報告された中門跡は、南大門跡が確認されない現時点では南門跡の可能性が高いことから、中門跡ではなく、南門跡と位置付けています。

中央の版築基壇跡の精査では、周囲をめぐる溝跡の四隅のコーナー部に土留めのピット(小穴)を検出し、この結果、基壇外装が木製と判明しました。

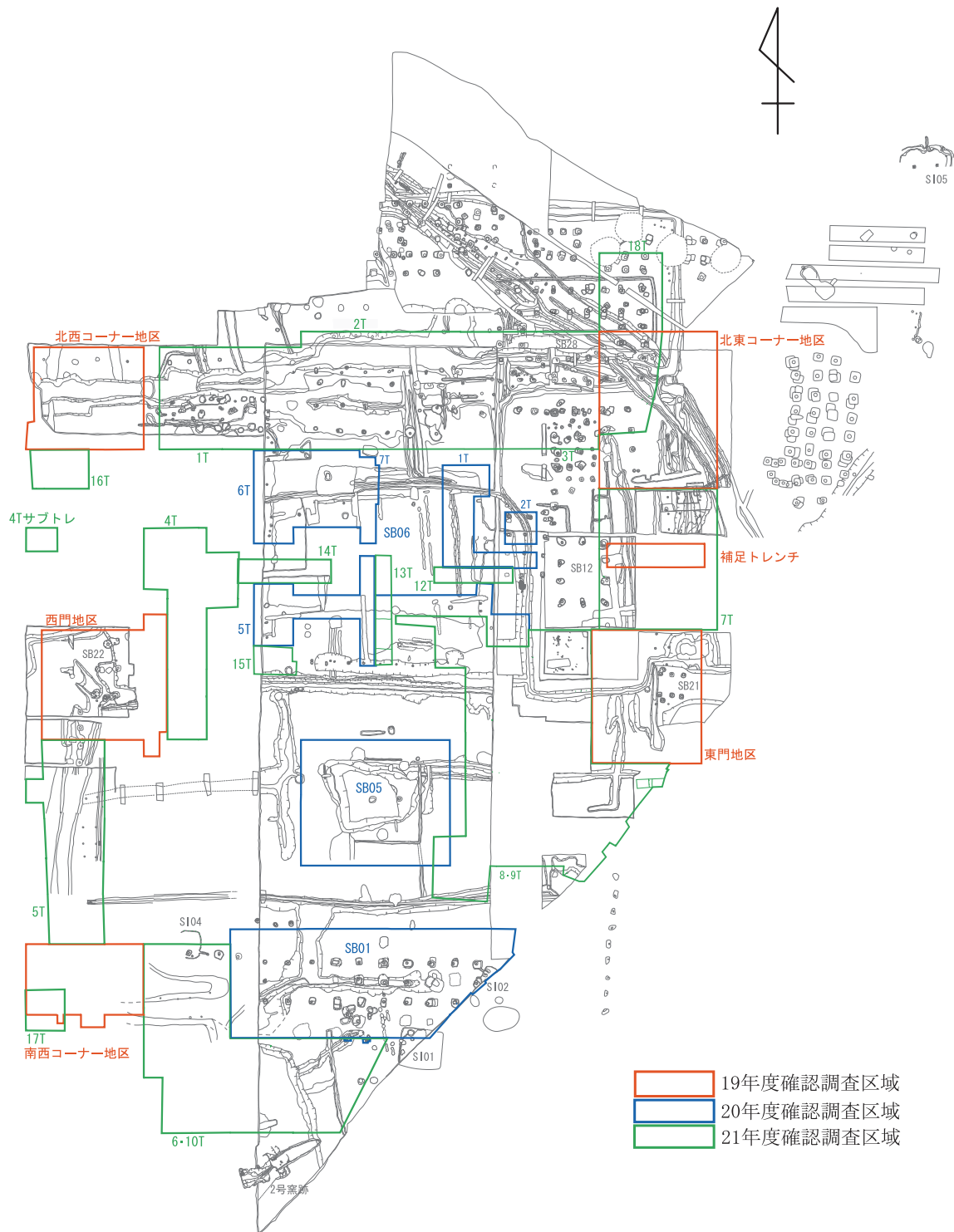
掘込地業建物跡の調査では、地業面の北東コーナー部を確認し、地業面の範囲が明らかになりました。

また、昭和 50 年代の調査では新旧 2 時期の変遷があるとされていましたが、精査の結果、変遷は認められず、新旧 2 時期あったとされた地業面の拡がり、周囲の整地層であることが判明しました。

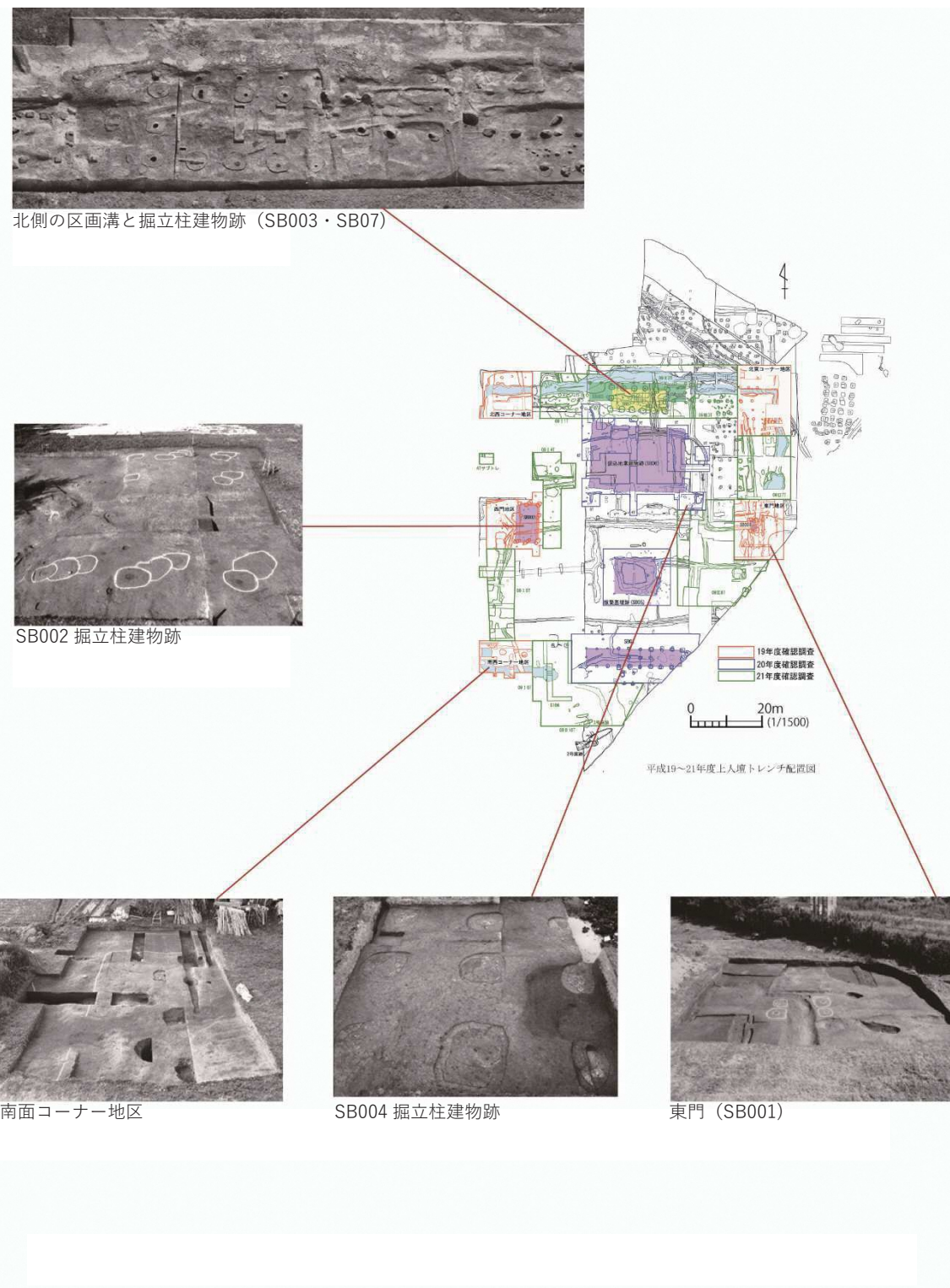
平成 21 (2009) 年度の調査は、昨年度までに実施した調査のまとめで、区画施設の検討や、伽藍配置・変遷等について補足調査を実施しました。掘込地業建物跡の北側では、北端の区画溝の構造や変遷を再確認し、その内側の建物跡も 2 間×9 間の長舎的な建物から、2 間×5 間の建物へと大きく変遷していることが判明しました。また、東門から北側に延びる築地堀跡と、それと並行する区画溝跡も改めて確認され、築地は積み土の基底部がかろうじて残存していました。このほか、調査区の南西端付近と掘込地業建物跡の西側で竪穴住居跡を新たに発見しています。



第 34 図 50 年代遺構配置図



第 35 図 平成 19 ～ 21 年度確認調査トレンチ配置図



第 36 図 上人壇廃寺跡平成 19 ～ 21 年度トレンチ配置図